書評

越後がっこう物語巻二 父ちゃん母ちゃん出番だよ

にいがた私学教育を守る父母の会
新潟県私立学教職員組合連合 編
（一、〇〇〇円）

〝学校とは〟〝教育とは〟をあらためて見すえるために

以前から私教連（県私立学校教職員組合連合）発行機関誌「太陽よ私学からのぼれ」を読ませて頂いていたり、私学の諸先生方との交流で、少しは私学の取組みを知っているつもりでいました。巻一での実践記録もすばらしいものであり、教育の本質を問いかけるものです。しかし、巻二の父母の手記を中心にまとめた内容は、教師である私などは強い感動を受けるとともに、「学校とは」「教育とは」を鋭く問われる思いで読みました。

県内の高校教育の、「スライスハム」とさえ言われる「輪切り」の現実に、子ども、父母そして教師は、その矛盾の中で苦悩しています。一方では、そういう現状の解決をはかる手だてを講じないだけでなく、逆に「日の丸・君が代」の押しつけ、管理主義的しめつけの強化等を県当局は推し進めてきています。今日の諸困難の根元ともなっている「競争原理」「差別・選別」を、臨教審路線はより露骨に推し進めようとしているのです。そして、多くの父母や少なからぬ教師は、子どもたちの問題行動、学習拒否、不登校、無気力等の現象に直面し悩みながらも、競争社会という「現実主義」の名の前に沈黙させられています。教育現場での管理強化は、教職員に組合運動をためらわせ、教育行政への要求をためらわせています。

この本の手記は、この様な現実の問題点を鋭く指摘し、今何をこそ大切にすべきなのかを感動をもって示していると思います。

一か月で「学校をやめて、もう一回、公立を受けなおす」と言い出した子にハッパをかけ、やがて、子どもが「ウチの学校の新入生歓迎行事はすごいんだぞ」「オレたちの手で学校全体を動かすんだぞ」と公立高校の友達に説明するのを、喜びと温かさをもって見守る母親の手記。子どもとともにたくましく現実を乗り越えていくすばらしいドラマです。そこには、教師の語る子どもの姿以上に、リアルに心に迫るものがあります。

また、バイクや飲酒で二度の停学を受けた子どもの姿と親から見た学校の対応のあり方の思いをつづった、「場

数を踏むと、純情な親も子供と一緒になってすれてくるのが自分でよくわかります」という手記は、私達教師の胸にぐさりとつきささります。子と親を「すれさせる」学校の対応に心が痛むとともに、反省をせまられている気がします。

「貧しくても私学で学びたい」の丸田氏の手記は、倒産に負けない親と子の闘い、私学の温かさに期待し子どもを入学させたいという思い、そして修学資金という教育行政の役割、学校の配慮などなど、心の通ったヒューマンな教育への熱い思いが伝わってきます。「悩みを出し合う『クラス父母の会』」、「父母の輪を地域にこそ」、「人の中で人にしていただき」、「親父の出番」、「わが子とならばどこまでも」等々は、学校と父母とが手を結んだ力、父母懇運動の中で教育に目を開き、学校・教職員を支える力を示してくれます。「開かれた学校」づくりへの展望を示してくれていると思います。

「『人と人との支えあい、助けあい』の気持ちは私学でこそ学びとることのできた財産」という言葉は、今多くの学校が失いかけているもの、「教育とは何か」を多くの学校に問いかけています。

この本は、単に私学のこととしてでなく、公立高校の父母・教職員の共感を、また多くの県民の共感を得るものと思います。

教員としての立場で考えるのは、手記にみられる様な父母の力を育て、巻一での実践を根底で支えている力です。それは十数年にわたり取組まれた私教連の教育運動なのです。地域・父母に信頼される私学づくりをめざした運動――家庭訪問運動、学級懇談会、教研運動、私学助成増額運動等々――を父母との結びつきを強める中で、父母自身による運動を組織する中で、粘り強く進める中で、形成されてきたものであります。子ども達の成長を長い目で見守る視点と同様に、日常の取組みのつみ重ねがいかに大切かを痛感しました。

私学の実践からみれば、公立高校は大きく立ち遅れていると言わざるを得ないでしょう。特に、公立高校固有の困難さがあるとはいえ、父母との結びつき、地域・父母に開かれた学校づくりの面での立ち遅れの大きいのが現実です。あらためて、父母との連帯がいかに重要かを認識し、また子どもに何をこそ求めるべきかを認識し、微力ながら全力をつくす決意です。

最後に、まだまだ多くの課題をこの本はあわせて提起している様に思います。その一つは、子どもたちに真の学力をどうつけさせていくかの問題です。「ケガと退学だけはさせないで」の声は、あまりにもさびしい学校への期待のように思えます。

多くの県民に読まれることを強く期待します。

（三ツ井　富士夫＝県高校学習会事務局長、新潟江南高校）